

琉球列島の農耕のはじまり

甲元眞之
熊本大学

KOMOTO Masayuki
University of Kumamoto

はじめに

種子・屋久などの熊毛諸島から与那国・波照間などの先島諸島まで1,000km以上に及ぶ南西諸島は、文化史的・自然史的には一括可能な側面をもつものの、種子島・屋久島などトカラ以北の北部圏、奄美・沖縄の中部圏、先島諸島（宮古・八重山）の南部圏に分けて論じることが一般的である⁽¹⁾。考古学の研究においてそれはことに顕著であり、熊毛諸島は九州島との関連が強く、弥生時代には稲作栽培が営まれ、古墳時代には鉄器の生産も行われるなど九州島の文化的影響をもっとも多く受けた地域である⁽²⁾。他方先島諸島は約300kmの幅をもつ宮古海峡がバリアとなって南西諸島の中では孤立的であり、中世以前の時期には却って台湾東海岸やフィリピンとの文化的繋がりが深かったことが明らかにされている⁽³⁾。一方中部圏は早い段階から北部圏を通して九州島と、中世以降は南部圏を含めた広範囲の文化的な交流は持ちつつも、琉球王朝形成にみられるように、南部圏や北部圏との文化的な関係はもとより、東アジア各地との独自の交易を通して、歴史的・文化的創造性を発揮した琉球列島における核地域であると言えよう。

南西諸島に展開した農耕について論じられるとき、農学や民族学の研究分野では多くは宮古・八重山諸島の先島が分析の対象であり、先島諸島で営まれる農法や栽培される種子の特徴などの事例をもって南西諸島全体に及ぼすのが殆どであると言っても過言ではないし、南方の農耕文化の北上という構想に併せてこの地域の農耕が論じられることが多い⁽⁴⁾。こうした先島という独自の文化圏に展開した諸要素を、無条件に異なった地域に適応させる研究手法は、歴史的にみて両者間に一定の文化的な繋がりが存在していたことが証明されない限り、十分には納得のいく論述とはなりえないのであり、そこからもたらされた結論はあまり普遍性を持ち得ないと言えよう。

これに対して考古学的接近法では沖縄本島が主たる分析の対象であり、九州島との関係が重要な解明課題であって、九州島を媒介にして本州や朝鮮にその来歴を求め、先史文化要素がどのように受容され、独特の世界が形成されたかという命題が多く議論の的となっているのである。先島諸島の考古学研究ではその独自性から沖縄本島とは切り離して別個に取り扱われるのが通例であり⁽⁵⁾、九州島と沖縄本島の間位置する奄美の考古学に関してあまり活発な調査研究が進展していないことから、一部の研究者を除いてあまり言及しないのが一般的であって、沖縄本島地域と九州島との直接的な関係が関心の的になっているといえる。

このように考古学とその他の分野の研究領域がまったくのすれ違いとなっていることや関心の的が異なっていることから、南西諸島全域にわたる初期農耕に関しては、各分野の研究が総合され、その全体像が明らかにされているとは言い難いのが実情であろう。

今回の研究課題は「琉球における国家形成過程」であり、沖縄本島中南部地域でのグスク時代以前の状況を把握することが肝要なことから、分析の対象を主として南島中部圏に置くことにする。この地域での従来の初期農耕に関する調査研究は考古学分野が中心であり、従ってそれ以外の学問分野の研究成果は必要に応じて参照するに留めたい。

1. 文献に表れた初期農耕関係史料

南西諸島における穀物栽培に関して、确实だと思われる最初の証跡は『日本書紀』「天武紀」十年八月の条にある、

丙戌、遣多禰嶋使人等、貢多禰国凶、其国去京、五千余里。居筑紫南海中、切髮草裳。粳稻常豊。一殖兩収。土毛支子・莞子及種々海物等多。

とする文に窺うことができる。これにより7世紀の後半期の北部圏では稲作栽培が営まれ、一度の収穫後に再び成長した稲から再度の収穫（ヒコバエ）が可能であったことを物語っている。この文献と考古学的資料と組み合わせることで南島北部圏では弥生時代から、中部圏北部では古墳時代後期から稲作栽培が営まれていたことを知ることができるし、南部九州での事例から、この地域での稲作は水田栽培により得られていた可能性が高いと見ることができる。ヒコバエについては南西諸島以外の地域に住む人間にとって極めて驚異的なことであつたらしく、次に取り上げる朝鮮漂流民による記録にもしばしば表われている。

沖縄本島や先島の農耕については、李朝『成宗大王実録』をはじめとする朝鮮の記録に記載された15世紀後半の朝鮮人漂流民の記事により知ることができる⁽⁶⁾。これらによると先島や沖縄本島では、イネ・アワ・キビ・オオムギなどが栽培されていることがわかる。西表島や与那国島などでは稲作が多く営まれているのに対して、その他の先島では畑作が優位であり、沖縄本島では「水田と陸田は相半ばして、陸田稍多し」と畑作栽培が水田栽培がやや優越する趨勢にあつたことがこれら史料で窺える。また当時は、イネを初夏と晩秋に、アワを晩春と晩夏にそれぞれ収穫する典型的な二期作が営まれていたことが各所に記され、晩秋にイネを収穫した後は、さらに沖縄本島においてはミズイモが栽培されていたことが知られる。こうした朝鮮李朝実録関係資料や『中山世鑑』、『琉球国由来記』などにより、沖縄本島では琉球王朝の早い段階から畑作栽培を中心とした本格的な農耕が営まれていたことが判明する。それではいつの時期までに沖縄本島では農耕の痕跡が遡上するのであろうか。

これまでに南西諸島での農耕の開始時期に関してはグスク時代とするのが通説である⁽⁷⁾。しかし沖縄貝塚時代後期にまで農耕の痕跡が遡上する可能性についての意見もすでに40年前から提示されてきた⁽⁸⁾。この想定は今日では、沖縄地域での発掘調査を踏まえて、弥生時代相当期（貝塚時代後期前葉）にすでに農耕が開始されていたという説⁽⁹⁾と古墳時代並行期に畑作栽培を中心とした農耕の存在を主張する説⁽¹⁰⁾とに収斂されてきている。またごく最近、沖縄貝塚時代前期（縄文時代後期後半相当）に遡って農耕が開始されていたという仮説⁽¹¹⁾もみられるようになってきた。これら諸説はその依拠する考古学的資料が異なって、中には予察や状況証拠に依拠しての論述がみられるために、個々にわたっての検証は極めて困難である。ここでは栽培穀物を出土した遺跡あるいは、耕作地などの直接資料によって、今日確認できる南西諸島における穀物栽培の実際を検討しながら、この地域における農耕の開始問題に言及してみたい。

2. 沖縄本島の農耕関連資料

沖縄本島の考古学資料によると、グスク時代にはイネ、オオムギ、コムギ、マメなどの穀物が多く遺跡から検出されていて⁽¹²⁾、最近ではグスク時代の畑跡と推定される畝の跡が数カ所の遺跡で発掘されている。さらに貝塚時代後期からグスク時代にみられる列状に配置された小ピット群を「移植」と関係する農法の痕跡と捉えることが可能ならば、穀物の種類は問わず、グスク以前に遡って畑作栽培が営まれたと想定することもできる⁽¹³⁾。しかしこれら各種畑作栽培が営まれたと想定される遺構は、栽培過程での具体的な人間の行為とその結果として地上に残される痕跡との相関関係が明らかに

されていないこと、またその所属年代の把握が難しいことなどから、遺構に伴う雑草を含めた種子の分析と種子自体の年代測定が伴わない現状では、明確な論述は困難である。結局のところ現状では、貝塚時代後期に穀物栽培が行われていたという確実な証拠としては、当該時期の耕作地以外でも、遺跡で発掘された穀物遺存体それ自体の検討によるしかないであろう。

これまでの調査により「貝塚時代後期に属する層」から検出された穀物の例としては、那覇市那崎原遺跡と伊江島ナガラ原東貝塚、久米島のヤジャーガマ遺跡の3遺跡が挙げられる。

a. 那崎原遺跡

那崎原遺跡は那覇空港に隣接する海拔20m前後の楕円形を呈する石灰岩台地上に立地している⁽¹⁴⁾。遺跡西側は落差15mほどの崖に隔てられ低平な海岸線へと続き、遺跡の東側は、長さが100mほどにわたって海拔5mコンタのラインが巾着状に入り組んだ入江となっていて、東南側は緩やかに下りながら海岸へと向かう地勢となっている。この遺跡で検出された植物遺存体は高宮広土により分析され、同発掘報告書以外にも様々な角度から詳しい検討がなされている⁽¹⁵⁾。

イネ、オオムギ、コムギ、マメ科などの穀物が検出されたのは、地山面を僅かに窪めた不整形の焼土と炭化層を混える遺構で、この遺構群の中とその周辺から採取された土壌の浮遊選別法によりこれら種子が発見された。この遺跡は新石器時代後IV期の単純期と考定され、紀元9～10世紀にこれら穀物資料の年代が想定されている。

検出された穀物はすべて、皮が取り除かれた胚乳（穎果）であり、それらはイネ2粒、オオムギ3片、コムギ1粒、アワ2片となっている。これらは上記した不整形の窪みのなかで焼土中と炭化層から検出されたものであり、こうした穀類を含めた遺物の出土状況は、脱穀の途中で廃棄されたことを暗示している。

この炭化穀物が検出された遺構の近くに半月状の、「鋤先」でつけられたと想定される窪みと溝跡が発見され、これらは畑遺構として判定され、従って那崎原遺跡は、上述の穀物と畑遺構の組み合わせが貝塚時代後IV期に属するものとしてグスク時代以前に遡っての畑作農耕の証拠が把握された遺跡として公表されてきた。しかし土器相からするとアカジャンガー式土器からフェンサ下層式土器にかけてのものであり、総体的にはフェンサ下層式段階に近い。

穀物以外に遺跡で検出された種子には、路傍に生える植物とともに、カヤツリグサ科のホタルイに類似したのものがあり、遺跡東側の低湿地で水田が営まれた可能性が高宮により説かれている。従って那崎原遺跡の資料からは水田と畑作両方の農耕が行われていたという見通しとなるが、ホタルイは水田以外の湿地にもはえることから、水田耕作の存在については推測にすぎず、その可能性を示唆するにすぎない。

b. ヤジャーガマ遺跡

久米島の北西部、海岸から500m内陸に入ったところに円形に陥没したドリーネ状堅穴から水平に延びたヤジャーガマと呼ばれる洞窟が2ヶ所あり、そのうちの南側洞窟に遺跡は形成されている。この洞窟の奥まったC地点で大量の炭化したオオムギやイネ及び籾殻が検出されている⁽¹⁶⁾。このイネや大麦を検出した地点は、グスク時代の土器を出土したA、B両地点とは離れて奥まった場所に位置していることから後世の攪乱は考えがたい。またその2年後の安里の短報では、グスク時代初頭の籾殻・藁層からムギ、イネ、マメ、アワなどの炭化物が大量に検出され、その下の貝塚時代後期の貝層中から炭化したイネの他に、アワ、ヒエらしき穀殻が検出されたという⁽¹⁷⁾。伴った土器は尖底土器が主体となっていることから、貝塚時代後期中頃にまで遡って農耕が営まれた可能性が安里により説かれている。前者の報告は表面踏査の結果で、後者の報告は発掘調査に基づくものと思われるが、報文が簡

単なために、遺跡の内容に立ち入っての検討ができないのが残念である。しかしここでは藁などととも、穀物が検出されたという点は重要である。

c. ナガラ原東貝塚

伊江島の南海岸に東西に展開する砂丘の内側に形成された貝塚時代後期遺跡で、熊本大学考古学研究室により過去4回の発掘調査がなされた⁽¹⁸⁾。発掘調査に伴って行われた高宮広土のコラムサンプリングにより、炭化したイネの穎果と殻、コムギの穎果が検出されている。出土層位は1998年度ではⅢ層からイネ20片、Ⅴ層からイネ1片、1999年度ではⅣ層からイネ40数片、2000年度ではⅣ層からイネ18片とコムギ1片の籾や籾殻がそれぞれ検出されている。従ってこの遺跡ではⅢ層～Ⅴ層にかけてイネの遺存体が発見されたことになる。Ⅴ層の事例は1片のために除外し、Ⅲ層は一部に攪乱を受けていることから、層位的にはⅣ層のイネが検討の対象となる。この層から出土した土器の型式からはアガジャンガー式と認定され、開元通宝や広田上層タイプの貝符など伴う時期であると考定されている⁽¹⁹⁾。しかし平底の括れ部が顕著なものや、刻目を持たない突帯を有する土器があることにより、アガジャンガー式土器からフェンサ下層段階にかけての頃と想定される。

以上の他に渡喜仁浜原遺跡でもマメ科の遺存体が検出されているとされるが⁽²⁰⁾、報告書には記載が無く⁽²¹⁾、委細は不明である。その時期はアガジャンガー式土器も多くみられるが、層位的には区別なく前期から後期までの土器が認められ、時期の比定は難しい。マメ科の中でこれまでリョクトウと鑑定されているものは東アジアに普通にみられるヤブツルアズキ *Vigna angularis var. nipponensis* であることが判明した今日では、栽培穀物の分析対象から除外するのが適切であろう。またアズキに関しては栽培穀物として列島にもたらされた可能性以外に、在来のヤブツルアズキからの出自をも検討しなければならないこととなった。

上記したようにグスク時代以前に遡上する可能性のある遺跡で検出された穀物には、イネ、コムギ、オオムギがあり、その他にアワ、マメ科の穀物がみられる。それらの所属時期はアガジャンガー式土器の段階かあるいはフェンサ下層段階に位置付けられることから、グスク時代以前に遡っての農耕の存在は確実であるという。

3. 穀物の出土状況

沖縄でこれまでに確認された穀物はいずれも炭化し、穎や芒を付着した状態で発見されている。さらにヤジャーガマ遺跡や那崎原遺跡では、藁などを混じえる炭化層から検出されていることは、種子が外部から持ちこまれたのではないこと、これら穀物は食用に供されるための前段階での処理の過程で炭化したことを示している。これらは九州島において弥生時代中期前半以前の段階では、遺跡から炭化したイネの穎果が多数発見されている事例と類似したありかたであると想定でき、穀物の処理過程での失敗品が放置され遺跡に残されたものであることが考えられる。穀物処理の過程で穀物が炭化する可能性のある機会としては、最近まで対馬でみられたオオムギの脱穀作業が挙げられる⁽²²⁾。

対馬佐護で最近まで行われていたオオムギの堅い芒や外皮を剥離する方法は、写真に示すような順序でなされる。まず穂首刈りされた麦穂は一定期間乾燥された後に、フォークの上に麦穂を載せて火を点け、手掻きで攪拌しながら穎果以外を焼き落すものである。その際しばしば焼け焦げが生じたが(写真1)、脱穀しやすいためにこの手法が用いられたと言われている。その後、踏臼で脱穀もしくは製粉して食料とするものである。

那崎原遺跡やヤジャーガマ遺跡において炭化藁や炭化層から穀物が検出されたことは、こうした対馬にみられる処理過程の結果として生じる遺構や遺物の在り方とは矛盾しない。当然のことながら沖

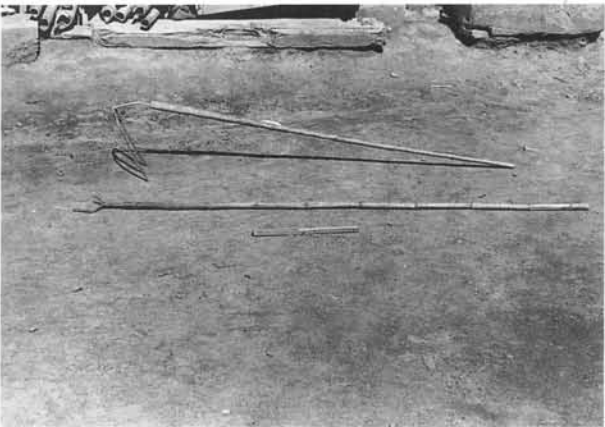


写真1 対馬佐護におけるオオムギの処理過程（1968年、甲元撮影）

縄貝塚時代後期にこれら焼き落しに使用される鉄器はまだ存在していないことから、フォークで持ち上げて焼くという芒や外皮の処理方法は想定できない。その際重要な暗示を与えてくれるのが、縄文時代のドングリの処理方法である。

縄文時代の遺跡から検出されるドングリの加工処理法について渡辺誠は、生食が可能なシイ類、水晒しでタンニン酸が除去できるカシ類、水晒した後に加熱処理する必要のあるナラ類に区別している。これらはシイ類を除いて基本的には水晒しを処理法の重要な過程と認識している⁽²³⁾。しかし西日本の低湿地を除く内陸地帯でカシ類が発見される遺跡では、ドングリ類は炭化して、皮がはがれた実だけの状態で検出されることが多い。こうした炭化したドングリが発掘される遺構は貯蔵穴として把握されているが、しばしばドングリ以外の炭化物も混じった層中で発見されることから、貯蔵のためではなく、あくまでも処理の過程で焼きすぎたものが放棄されたと考えるのが適切であろう。ドングリの灰汁抜き過程で焼く手法がとられる民族・民俗事例は未見であるが、イギリスの新石器時代において炭化したハシバミがしばしば発見されるのは、焼くことでタンニン酸を除去する手法があったものと想定されている⁽²⁴⁾。東アジアにおいてもクリの一部は炒めることでタンニン酸を含む膜を剥離する事例があることなどを考慮すると、具体的な工程は今のところ不明ではあるが、「焼く」もしくは「炒める」あるいは「熱する」ことで食物加工をおこなうことは（補注）、西日本では縄文時代以来の伝統があると言えるのであり、なんらかの形で火を使用しての処理法が営まれていたことは十分に想定できよう。

4. ナガラ原貝塚IV層の年代

沖縄貝塚時代後期は高宮廣衛により、幾度か修正を加えられてきた結果、真栄里式土器→具志原式土器→アカジャンガー式土器→フェンサ下層式土器に編年され、沖縄本島では一般的に使用されてきた⁽²⁵⁾。ところが最近こうした編年についての疑義が提示され、アカジャンガー式土器に先行する具志原式土器について、多様な型式の土器群が混在しているものとして、編年から除外する考えが提出されてきた。すなわち阿波連浦貝塚VI層出土土器群を貝塚時代中期の仲原式土器との過渡期として、以下浜屋原式土器→大当原式土器→アカジャンガー式土器→フェンサ下層式土器と編年され、アカジャンガー式土器に先行する具志原式土器段階が欠落しているのが特徴的である⁽²⁶⁾。この編年観は尖底土器と平底土器を指標として貝塚時代後期を大きく二分する想定が前提となっている。

従来沖縄の土器を標識とした時代層の把握においては、縄文土器や弥生土器にみられるような「型式学」的分析とは異なっているが、尖底土器は沖縄在来の仲原式土器の伝統を引く器種であり、平底土器は外来の器種であると区別して、尖底土器と平底土器の占める割合で時代層を掴む試みは、大勢を把握する手法としては理解が可能である⁽²⁷⁾。ナガラ原東貝塚1998年の報告において、貝塚時代後期では尖底が優勢な段階から尖底と平底が相半ばする段階、平底が優勢な段階、そして平底に統一される段階へと大きく変化する様相が認められることが指摘されているのはこれによる⁽²⁸⁾。過去4回に及ぶナガラ原東貝塚IV層出土の土器を改めて検討すると、大部分が明瞭な括れ部をもつ平底土器で占められていることが知られる。また文様においても刻み目突帯を有する土器とともに、無文突帯の土器もみられ、甕の外表面には指痕や調整痕が残されることが多い。また注口土器が見られることは貝塚時代後期の後半段階であることを示している。従ってこのIV層は従来の編年による限り、アカジャンガー式土器からフェンサ下層式土器段階にかけて堆積した層であると認定できる⁽²⁹⁾。

アカジャンガー式土器はアカジャンガー貝塚出土品を標式とする土器群で、括れ平底をもつ甕形土器が大半を占め、一部に壺形のものがある。文様は口縁部に集中し、沈線文、刺突文、波状文などで

構成され、頸部には刻目突帯文が施されることもある。このアカジャンガー式土器は奄美諸島の兼久式土器と並行関係にあり、開元通宝や広田上層タイプの貝符との共伴関係から7世紀以降の時期が所属年代であると想定されている⁽³⁰⁾。また沖縄本島にみられる括れ平底土器は兼久式土器との関係があるといわれ、貝塚時代後期段階に奄美地方との関係が高まったことが指摘されている⁽³¹⁾。

こうした遺物の上で相互に関係があるコンテキストでは、沖縄本島地域の土器の動態を把握する時に、奄美地域の土器を参照することが有効な手段となる。奄美地域の土器変遷を参照することの利点は、沖縄本島の遺跡では各時期の遺物が重層する傾向が高く、層位的分析が困難であるのに対して、奄美地域では比較的「単純時期」に形成される遺跡が多く、層位的攪乱が少ないことから土器群の様相を把握することが容易なことにある。

兼久式土器については、河口貞徳により奄美地域の独特な土器として弥生時代に続く時期の土器型式として設定され、その後これまでに中山清美や高梨修により兼久式土器の編年が試みられている⁽³²⁾。高梨は名瀬のフワガネク遺跡出土の土器を基本にして兼久式土器の前半期を二類型に区分している。

1類は口唇部に刻目をもち口縁部に沈線文のみを有するもので、甕と壺の器種があり、頸部に刻目突帯があるものとないものの二種が存在する。2類は口縁部以外に胴上部に沈線文を持つもので、なかには指や草状工具での調整痕を器壁内外に留めるものも見られる。底部平底の括れはあまり明確ではなく、木葉痕を甕の底部に持つものが多い。これら二種類の土器は笠利町用見崎遺跡をはじめとする⁽³³⁾奄美各地で大量に発掘されていて、一定の時期的なまとまりを示すことは明らかである。1類土器は古墳時代前期並行期に比定されているスセン當式土器の系譜を引くもので、口縁部の文様や刻目突帯をもつ甕形土器などはスセン當式土器に継続することが考えられている⁽³⁴⁾。すると兼久式土器の初現期は5・6世紀以降に位置付けられることとなる。

アカジャンガー式土器に伴う平底には、底部の括れ部が弱い、木葉痕を底部にもつ土器は知られていないことからすると⁽³⁵⁾、貝塚時代後期の土器が兼久式土器の影響を受けていると仮定した場合、フワガネク遺跡や用見崎遺跡段階以降の兼久式土器と関係することとなる。用見崎遺跡の兼久式土器の放射性炭素年代が 1390 ± 60 BPであることは、同出した古い段階に鑄造された開元通宝の年代とも矛盾しない。このことはナガラ原東貝塚の年代は遡っても8世紀以降に比定されることを意味している。ナガラ原東貝塚遺跡ではV層で 1410 ± 60 BP、IV層で 1570 ± 60 BP、 1490 ± 60 BPが示され、下層の年代が上層よりも新しく測定され、しかも66%の確率では年代が重なり合わないという結果となっている。これらは層位に攪乱があったか、層位の認定が誤っていたことを意味していて、このままでは使用できないことを表している。

ナガラ原東貝塚のIV層の年代が8世紀以降とすると、こうした年代観は日本列島にコムギの出土件数が増加するのが奈良時代以降であるという見解とも一致する⁽³⁶⁾。コムギは粒が堅く、製粉しない限り有用な食料とはなり得ないのであり、こうした考古学的事実は、奈良時代以降に唐臼が一般に出回り始めてはじめて、小麦栽培が全国的に普及するようになった現象と軌を一にするものとみなしうる。

おわりに

沖縄本島で発見された栽培穀物の中で従来最も遡上する事例を検討してきた結果、ナガラ原東貝塚や那崎原遺跡、ヤジャーガマ遺跡などの資料は穎や芒が伴うものであり、また炭化藁などや焦土層と「共伴して」発見されることから、これらは在地における脱穀過程で残された資料と考えられ、従来想定されていたような他地域からの搬入品ではないことが明らかとなった。その所属年代はアカジャンガー式土器からフェンサ下層土器段階であり、奄美諸島の土器との相対的な関係からは、8世紀

以降に属する資料である可能性が高いことをみてきた。すなわち、このことはグスク時代に先行して沖縄本島では穀物栽培農耕が営まれていたことは確実であることを意味している。またこの時期の遺跡出土穀物の組合せからはイネ以外の穀物が多くみられ、畑作栽培によりもたらされた可能性が高く、その点においてもグスク時代に畑作が重要視された農耕に直結するものであったことが知られる⁽³⁷⁾。

一方貝塚時代後期になっても遺跡出土の自然遺物の組み合わせには従前のものと殆ど変化が無かったことは木下尚子や盛本勲の検討により明らかであり⁽³⁸⁾、グスク時代以前の農耕が海浜での採取活動を中心とした多様な生業形態の中の一分野であったことは容易に想定できよう。しかし貝塚時代後期後半以降沖縄本島においては集落遺跡の数が急速に増加するとともに、遺跡の立地が海岸砂丘上から離れて台地の端部に移動する傾向が顕著になることが指摘されている⁽³⁹⁾、このころに、人骨にみられる形質変化（グスク人の形成）が看取されるという人類学者の報告や⁽⁴⁰⁾、活発化した九州島との交渉などを念頭におくと、小規模といえども畑作栽培を中心とした農耕の導入は、沖縄に新たな時代変革をもたらす大きな誘因となったことが推測される。

今後は穀物栽培導入によりもたらされた社会現象すなわち、栽培穀物の種類とその量的把握とともに、穀物栽培を営むことで生じる各種道具の組み合わせの違い、中でも調理具・煮沸具の変化が遺跡の立地条件や集落の形成や構造にいかに関わりをもっていたかなどを考古学的に検証する必要があることはいうまでもない。

本文を草するにあたり数々の意見交換を行うことができた、研究代表者である木下尚子教授をはじめ、このプロジェクトの分担研究者各位に御礼を申したい。また農耕関連資料の収集と沖縄・奄美考古学研究の現状については、中村憲、盛本勲、中山清美、新里亮人各氏のご教授を得ることが多かったことを記して謝意を表したい。

(注)

- (1) 国分直一「史前時代の沖縄」岩村忍・関敬吾編『日本の民族文化』講談社、1959年。なおこの地域的な区分は生物地理境界線によっても示される。トカラ海峡は哺乳類・爬虫類・両生類（渡瀬線）で、宮古海峡は鳥類（蜂須賀線）で旧北区と東洋区の違いが表現される（安間繁樹『琉球列島』東海大学出版会、2001年参照）。
- (2) 上村俊雄「南九州の考古学」『隼人世界の島々』小学館、1990年。
- (3) 国分直一「八重山古代文化をめぐる諸問題」『南島—その歴史と文化』1980年、大浜永亘『八重山の考古学』先島文化研究所、1981年、国分直一「琉球先島の局部磨研石器所見」『えとのす』23号、1984年。
- (4) 渡部忠世『日本農耕文化の展開と系譜』59・60年度科学研究費研究成果報告書』1986年。
渡部忠世・生田滋『南島の稲作文化』法政大学出版局、1984年。
渡部忠世『稲の大地』小学館、1993年。
渡部忠世監修『琉球孤の農耕文化』大明堂、1998年。
渡部忠世監修・農耕文化研究振興会編『琉球孤の農耕文化』大明堂、1998年。
- (5) 金武正紀・当真嗣一「沖縄における地域性」『岩波講座日本考古学』5、岩波書店、1986年。
国分直一『海上の道』福武書店、1986年。
- (6) 李熙編訳「朝鮮李朝実録所載の琉球諸島関係資料」『沖縄学の課題』木耳社、1972年。
- (7) 安里進「沖縄における炭化米・炭化オオムギ出土遺跡」『考古学ジャーナル』第32号、1969年。
当真嗣一「考古学上より見た沖縄のグスク」『紀要』2号、沖縄県教育委員会文化課、1985年。
安里進『考古学からみた琉球』上、ひるぎ社、1990年。

- (8) 新田重清「最近の沖縄における考古学会の動向」『琉大史学』創刊号、1969年。
- (9) 高宮広土「植物遺存体からみた柳田国男『海上の道』説」『民族学研究』第63巻第3号、1998年。
- (10) 高宮広土「ヒトの行動からみた沖縄の先史時代」『はじめて出会う日本考古学』1999年。
- (11) 伊藤慎二「琉球縄文文化の粹組み」『南島考古』第13号、1993年
伊藤慎二『琉球縄文文化の基礎的研究』國學院大學大学院研究叢書文学研究科、1999年。
- (12) 盛本勲「九州出土先史時代植物遺存体集成—沖縄—」甲元眞之編『環東中国海沿岸地域の先史文化』第5編、熊本大学、2001年。
- (13) 日本考古学協会2000年鹿児島大会資料集1、『はたけの考古学』2000年。
- (14) 那覇市教育委員会『那崎原遺跡』1996年。
- (15) 注(9)に同じ。
- (16) 安里進「グシク時代開始期の若干の問題について」『沖縄県立博物館紀要』第1号、1975年。
- (17) 安里進「沖縄貝塚時代後期に稲作—久米島ヤジャーガマ遺跡の発掘で—」『考古学研究』第24巻第2号、1977年。
- (18) 熊本大学文学部考古学研究室「ナガラ原東貝塚」『考古学研究室報告』第34集、1999年。
熊本大学文学部考古学研究室「ナガラ原東貝塚2」『考古学研究室報告』第35集、2000年。
熊本大学文学部考古学研究室「ナガラ原東貝塚3」『考古学研究室報告』第36集、2001年。
熊本大学文学部考古学研究室「ナガラ原東貝塚4」『考古学研究室報告』第37集、2002年。
- (19) 岸本義彦・西銘章・宮城弘樹・安座間充「沖縄編年後期の土器様相について」『琉球・東アジアの人と文化』高宮広衛先生古稀記念論集刊行会、2000年。
- (20) 注(12)に同じ。
- (21) 沖縄県今帰仁村教育委員会『渡喜仁浜原貝塚』1977年。
- (22) 甲元眞之「播種と収穫」『弥生文化の研究』第2巻、雄山閣出版、1988年。
- (23) 渡辺誠『縄文時代の植物食』雄山閣出版、1975年。
- (24) I. F. Smith, *The Neolithic*. C. Renfrew ed. *British prehistory*. Duckworth, 1976.
R. Bradley, *The Prehistoric Settlement of Britain*. Routledge and Kegan Paul, 1978.
- (25) 高宮広衛「暫定編年の第三次修正」『沖縄国際大学文学部紀要社会科学編』第12巻第1号、1984年。
- (26) 注(19)に同じ。
- (27) 沖縄国際大学考古学研究会「土器分科会研究報告」『第三回大学祭発表要旨』1974年。
- (28) 熊本大学考古学研究室「ナガラ原東貝塚」『熊本大学文学部考古学研究室報告』第34号、1998年。
- (29) 注(18)に同じ。
- (30) 木下尚子「開元通宝と夜光貝」『琉球・東アジアの人と文化』2000年。
- (31) 池田栄史「沖縄貝塚時代後期土器の編年とその年代的な位置付け」『第2回奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流』名瀬市教育委員会、1999年。
- (32) 河口貞徳「奄美における土器編年について」『鹿児島考古』第9号、1974年。
中山清美「兼久式土器」『南島考古』8、9号、1983年、84年。
高梨修「いわゆる兼久式土器と小湊・フワガネク(外金久)遺跡出土土器の比較検討」『第2回奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流』名瀬市教育委員会、1999年。
- (33) 熊本大学考古学研究室『考古学研究室報告』第31、32、33号、1996年～1998年。
なおこの第3次報告書で「アカジャンガー式土器」としたものは、高梨の兼久2類土器のヴァリエーションの一

つであり（高梨 1999年25ページ左側上から3段目の土器など参照）、この資料で兼久式の2類とアカジャンガー一式の並行関係を捉えることはできない。

(34) 上村俊雄・本天道輝「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『鹿大考古』2号、1984年。

新里貴之「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化』2000年。

(35) 沖縄後期土器研究会・熊本大学考古学研究室『アカジャンガー式土器の再検討』2001年。

(36) 小畑弘己「熊本大学構内遺跡における古代コムギの検出とその意義について」『人類史研究会第12回大会発表予稿集』2000年。

(37) 注(9)に同じ。なお『琉球国由来記』によると、琉球王朝の王はオオムギとイネの祭を行うために、聞声大君・司雲上・按司を伴って、2月に久高島を、4月には玉城と知念を訪れた。これはアマミク（天から降った人の意）が天を訪れて貰い受けた穀物の種子のうち、ムギ、アワ、キビ、マメを久高島で、イネを知念と玉城で播種したという伝承に基づいている。この祭りが行われる時期はそれぞれの穀物の播種・収穫時期とはいずれも異なっていることから、農耕儀礼において久高島が重要視されていた点を勘案すると、沖縄本島においては畑作栽培が稲作よりも古くから栽培されていたという伝承があったことを暗示するものかも知れない。

(38) 木下尚子「南島」『季刊考古学』第14号、1986年

盛本勲「南西諸島出土先史時代動物遺存体集成」甲元眞之編『環東中国海沿岸地域の先史文化』第2編（追補）熊本大学、1999年。

盛本勲「沖縄出土先史時代植物遺存体集成」甲元眞之編『環東中国海沿岸地域の先史文化』第5編、熊本大学2001年。

(39) 宮城弘樹「貝塚時代後期土器の研究（Ⅱ）」『南島考古』19、2000年、及び注(10)の高宮論文。

(40) 土肥直美『南西諸島出土人骨の形質学的・人類遺伝学的研究』琉球大学、1997年。

安里進・土肥直美『沖縄人はどこから来たか』ボーダーインク、1999年。

(補注)

籾の着いたままの状態で炒って米を食べる風習は「焼き米」として中国地方に広く認められる。『聞き書き 島根の食事』（農文協 1991年）によると、以下のような手順で食される。「稲刈りのとき、水口などでできる実入りの悪い稲か、完熟期前の稲を刈り取り、籾殻のつきのまま一晩水に浸したものを、水を切ってほうろくで炒る。これを臼で搗き、唐箕にかけて籾殻を除く。焼き米を茶碗に入れ、熱い番茶を注ぎ、塩で味付けし、適当にやわらかくして食べる。香ばしさを味わう」。こうした「焼き米」にして食する習慣は西日本各地に認められることは農文協の『日本の食生活全集』を参照。

グスク時代になっても依然として石製調理具が検出されることは（田代理恵「石器」熊本大学文学部考古学研究室『考古学研究室報告』第36集、2001年）これらを利用しての調理が行われたことを推測させる。すなわち、焼いて芒や殻を除去した後、さらに擦石や石皿を使用して実を取りだし、焼き米のように蒸かして食するか、あるいは製粉してハッタイ粉のようにして食べた可能性が想定できる。この点において、民俗事例として先島諸島では珊瑚礫を使用しての脱穀が営まれていたことは極めて示唆的である。